

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十九回）

あらつ うみ

「荒津の海」

く男女の問答歌く

筑紫（九州）に関連する『萬葉集』には「荒津」「荒津の浜」「荒津の海」「荒津の崎」などと「荒津」の名が詠まれている。

・【荒津】は古代には「娜^なノ津」、「娜ノ大津」「博多ノ大津」とも呼ばれ、今の福岡市の中央北部に位置し博多港に面する福岡市中央区西公園付近にあった古代の港で、九州と壱岐・対馬・種子島（九国三島）を治め、国を守る辺境防衛、外交を司る大宰府の外港として海路で大宰府に往来する人々の出入口としての役割などを担った。

・今日の西公園は古くは荒津山あるいは荒戸山といわれ、その突出した先が古代の「荒津の崎」であり付近の海面を【荒津の海】、海岸を「荒津の浜」といったのである。

・万葉集には荒津の港あたりでうたい伝えられた民謡であろうとの説がある次の女―男の問答歌がある。

ぬさまつ

いは

1) 荒津の海 我れ幣奉り 齋ひ

はやかへ

おもがは

てむ 早帰りませ 面変りせず

卷十二 3217 作者・未詳

（解説）荒津の海、この海の神様に私は幣帛を捧げ、身を清めて祈つていましょう。一日も早くお帰りになってくださいませ。旅やつれなどせずに。女の送別歌。

・「幣」は旅路の安全を祈つて神に捧げる品。・「斎ふ」は身を清めて不浄ふじょうを祓はらつて神に祈る意。

あさ

さ

つくし

かた

い

2）朝な朝な 筑紫の方を 出で

み

ね

あ

な

見つつ 音のみぞ我が泣く い

たもすべなみ

卷十二 3218 作者・未詳

（解説）毎朝毎朝、船上に出てはるか筑紫の方を見やりながら、私はただ声をあげて泣き暮らすことだろう。どうにもやるせなくて。筑紫の方を出て見て、泣きに泣いています。どうにもするすべがなく

て。

（参考文献）・伊東博著「萬葉集釈注」樋口和也著「萬葉集地名歌総覧」他

(写生地)・古代の「荒津の崎(岬)」に想定される西公園の先端(西
展望広場)から北側を見ると海岸線は埋め立てで遠のいたといえ、
正面には博多湾(古代の荒津の海)とその遠景に万葉集にも詠われ
ている「志賀島」しかのしまが正面に浮ぶなど、まだまだ福岡湾周辺に残る
万葉風景を描く。

(池田杏花)

